河達

へ13
2889
5上

鳴神

鳴門

上巻

井蛍

阿波之鳴門五之巻

十郎兵衛弓子所縁さて八栗山の住人
並浅茅原令と恨る女僧とつのる事

栖亭・種彦子著
友人玉泉癡夫校

是ハ扨おき。阿波の十郎兵衛を。畠山殿門と詞とゝのひ
ぶゝるとき。家臣郎等ども。あるハ海へ没るみ。あるハ山
ゝ。みな殺しとなるゝ。賊室のうゝ。
それ〳〵まるちあるとへ紛入つゝ。ゝるゝ子を誘て
のれを隠家。阿波の国阿波郡岩倉ようゝ。手下よゝ

へ13
2889
5

つけさまぐゝ抱ゑ〜ろんば。ら子も漸く息いきづく。正氣
つかゝゝあるとりをみるゝ。えもはるきれ賊が家ふ。鬼のごとき
大男左右よいすがを。あるを猿の皮ふて葉面をたるものと
ゆ。ゑをくるま太刀を佩。あるい油松明鉄鎖を腰ゝ。ほけ
い脊ゝ龍をゆれづみ〜。頼ゝ三日月のごとき刀疵とうけと
るもありて。ゆゑあるのかそろ〜とゝ又泣ひりもすぐさあり
さゑなゝ。上坐ゝ。ゆるゝ。阿波の十郎会澍おらゝ
むうつゝ。ひるゝ。このゝ女性さのみるそれゝ。我々
へ漠〜て活計とうす。者ゝ。ゆゑ道不義を行

ふ盗賊ゝいの〜ゝ。御身前夜阿波の鳴門ゝ海賊ゝ土
あひあやまつゝ。我漠舩へ。ちらゝ。たゝ。山陸へ。ほき
殺り〜ゝ。そもいうゝ。人の妻ゝ。ゝと向りれば。ら
すこし心ちらゝ。ず人々のゝ抱を謝〜。さくゝひろる
ゝ妾ゝ。阿波の國司畠山国清の家同名多門このゝ者
の妻ゝて侍べるゝ。此度本国へくゝる海路ゝ。盗賊ゝ
あひかく難義ゝ。ゝ伝ふゝ。ふゝくの御ゝとけゝ
ゝ。妾ゝ阿波の国徳嶋へおくりてたゝく。彼地ゝいたゝ
夫子の安否もゝるべ〜と。物ゝる十郎兵衛さくゝと

昭和九年七月三日購求

丹。うち驚こと我合壁よ位し。引子畠山多門といふ。貴
家の室とうりたりと。津の國よりく街説もて参ふが
さてへ我こうまかけ一女ありるうと。目よとえくく
乃紅よ与次右衛門う娘引子よ。まうべうもうけれを
心のそと丹吾ひうり。引子草賊ふむうひ。さるそもこの
地を何とす所うりと。とひけれが兵六こうこう。山地へ阿
波の国とのこうさすれ。十郎兵衛目よりくちくしめのく
なよう。物語をひとうこう。此地へ日向國宮崎郡川戸村
といふ所うれが。徳嶋つへなど。まーされと。御身をそ

日ふかくりゆるべーと。口ふいづるまくに。たをうり手下よ命
じて引子をうこうせけれが。兵六へ更ふ不審をれ
ざとうり。十郎兵衛手鉄の三太ひうこうる。船よ招く
ゆくるい。我昨夜鳴門こふわくく討とうたる武人へ畠山
多門といふる。者うるようく。彼女がのがうりまく。ゆた
るが彼畠山多門といふるい。當阿波の國司國清が合参
うれで。當國ふ住居せんこうるい。我こが僉議もきびーうる
べー。責ひ汝がふる里讃岐の國三木郡へ。山とく谷ふく。
多をうくさんこうい。屈強の所うるア。畠山の樓船よ切とア。

ゝそくてくの金を得るれば。ひとすじ紙地よりらえ。
外をやとりかくるをーと。ひるれが三太も宜うりぶらけ
ぶひ。次の日雑具をそこ〳〵とりうとづけ。おらみあん徳嶋一
おくりかくすと。いひのざむを作賀をたすけの色草賊ま
かゝせ。三木郡八栗山よりとりり。引子ハ徳嶋よいるる
とのみ。かりひーよあゝぬ山路の白屋まつれ四を。夫よ
つを何地つもおくり四くげをひもええざれが心のそとり
喜びず。おそるく十余ひうへ句ゝいひるゝ日句の周
とやゝんゝのゝ。のゝ多ひーん妾をーと。徳嶋へおくりへす。

ゝとくへーづさへゝるくてかる。山路ゝ誘引のひーん。伊
る田縁まやと。問けれべ十郎兵御むてとゝ笑ひいゝま
女汝まんをる一品あくと。背押をひゝをゝ。一ッのふく
さ色をとりひゝ。引子が目をくつをつる。引子を
何の心もつうず。手をとりあげゝ。ひゝけハ中まま
履のゝと。別る道のく紙の玉章あり。いゝりつ。
くすゝ。

拾ひくいをてもを見れ白浪のゝるてふあゝの意貫
とゝいつけく。我手跡ゝをれゝのー忽ち往年今帝

弾子白浪の
隠語
ちどう

鳴門巻之五

はなる木履なる足がひ出。なみ㪅びて驚き此時初
めて十郎兵衛が熟みるに。ふるかに年はたけたれども
今市てまぎれなしとは何とせんとかけよられは十郎兵衛
山刀をぬきはなして弓子が襟を畳みにぬひつけ柄を握てう
とかせすかよわ弓子汝。先年此哥に我におくり。くるじやし
とおやへあるまじや。る日汝が口より多門が妻なりといひさ
るあくしらく。おきなりとも心づきしが我面をえしらぐ
たるに。幸ひ此八栗山にいざなひされば。よる兵さへ
まく女の足あしく徳嶋へゆんとかひもよふにて今はかく

戀慕まさりしのみならず我狸性をあらはしけれバ逆
より白浪の哥をよりて。恥辱をあたへたるを知てむねんさ
もなる方なく再び汝にあひなん心の隙に横陳して我
煩悩の胸さんでるればそれに。遺恨の心はりきなし。徳
嶋へおくりくさんとが。佛にひとしき心ならんや今云きれ
恨はあれども其悪顔色に何ぞ我のこりくればさ
我を悪棍となりひそ汝らそえいる短命賊恐しくも
よりいひときつんとなす。かみあなやと叫んで身をふるは
せし惣身の刀を出して。十郎兵衛がのけさまに突たま

し。山刀おつとりあげ。自害ちんとするしるれば十郎兵衛飛
あがり。手より刀とりあげ。帯よりて捻先ぜ
しらみくるあげ兵六喜佐ゑんどの。手下のひつけ
一室の入口み格子をうちつけを内より子をとめをぞ草
賊を番人とるし。昼夜おこうるくつけおとろんへ子
へ苑ことさら。心みまうせば二日三日へ食をとらず餓死
うるさんと思ひしが山所い讃岐の國三木郡。のゑ所小て徳
嶋へいさまで遠うゝぬよし八。手紙うるとゑ又空
さうるをよしぶうみ田て草賊等ゑ。心をひるさぜ此所ゑふ

げのびんとさるく計ゆめぐらしれど。十郎兵衛い天性
奸佞うる男うれば。ひるく紛誤いるさでをけり嗚呼いさ
ーいうゑ。弓子へ一室ゑおーらめられ夫子の生死を
きうまく思ひのみゑて死もやらを。活もやらを憂命を辛
じてうぐゝへ。ぐづゝみ月日をおくりうり是よりへ別り
るーとでむをき。物ゑりゑー。因みのゑ弓子紋入る
して。四時ゑすぐ忽然とーて息のく。常のごとこうり
たるハ畠山の宝物のうちみ蘇生丹とのくる仙薬あアーゑ
十郎兵衛盗来ゑ此薬を口のうちゑ。洒いんー故つゝ十郎兵衛

大ゐ喜び彼仙某を手下の者ふさへふくつゝみ衣樹の抽斗よりおさめかゝく扇鐍をさしもさたりとゞ是い扨も鳴門ゐおひくらゝされ一多門が家ゐ一両人解少て津の国小系うゝ。畠山国清が舘ゐいゝう。多門が鳴門のおきまて。海賊よいであひ船中のうゝく。討死の却をゑ告けれが國清い只一人の舎弟ゑ也もうく失ひ怒氣心頭よりおこう。直ゐ阿波の国ゝ人をゝせゝく。海賊の性名をゝひきえむるゐ。阿波の十郎ひきくといへる者ゐるゝ。少生一十郎兵衛が。阪家を牧人ゑりつゝとう囲ゝうゝや何地へうゐ

げうせゝまゝ。國清が討来ゝて屈強の兵士を賀船ゐかゝ。西海を要めゝれゝ。元来船路ゐくゝしゝを海賊うのれい容易いとゝゝゝくゝゝえゐけう。浅葉い多門弓子が。非命の死とゝゝへば雨ちゝくゝと泣く死も。ゝゐんとおりくゝ。次郎九郎が心を。ゝうゝひゝゝ。外抱ゐすゝを。ちゝゝゝくゝとゝゝゝ。重ゐ乃薄命をゝうゝゝみ。髪をおゝゝゝ。尾とゝゝ住吉勝間とゐゐ。所をゝゝゝくゝかりの菴をむゝゝ山をゝちゝうゐめ。ゝ子が八水ゐゝ。たるい。ゐのゝゝくゝゝゝれゝゝ涙のよゐすたねとゝりぬ。次郎九郎が孝心いむ

丹倍し来のまゝ浅葱が側をよりやすずかるれと心
外もちひけり。

於弓我子と有て順禮を殺す

並軍太十郎兵衛が家に宿る事

さてもゆみ子へ十郎兵衛よりくられ。塵ふうき座室ふと
めおうれ夫子のもくへ我をきやくおりひかうたらへ。乱心と
つのりて夢のやうに。六年をおくりそれど。十郎兵衛い心の
くうちをておさけり。漸心さざやりて弓子熟お
りよよふ。所珍くてあらんまん。百年をふるとても。

夫子にあひえんと。ひとひもよゝず。一度阿波の國に帰
り。多門君にまみえて後。自害して分説せんと心をさ
だめ漸に心さけ。さるにあらず。大坑に身を
没荊棘をいとくるしみをかくし。心にそなめ
下級もいつのやどにか。とけそめて十郎兵衛に身を
まうせけるぞ。くらおし。十郎兵衛大よろこ
かゝ我妻がおよもてうせぞ。奸智ふうをいたて。
くるして逃いでんも知るべうすと。みだりに心を
るさでれば。弓子もせんすべなくて。又いとでゝに一年を

おくりする。十郎兵衛も今はなごりをしとや。ひけん。弓子小のみ家をあつけ。手下を引つれ行地へうりでさること。生平うるわが弓子大よろこび。道よまよひし。四国巡路の修行者を家よとめ。一然ぶ死者もあり。べ。泉上死仔細うとあ。路ちるべとはしく逃出んと計り。おかゝこれ老たる女愚なる土民よりく物の用よたつべきともおかべ祈で心うゝびも日をうさね七月もなうをしちく。形紀魂まほる夜とゝなるとふさ此夜もお弓一人家よありて心をうりの香華を佛前へそ

うゝ庭さきよりめぐりのく。谷川へおりとち。胸伽乃水汲とりく。手もたもげよたちうゝるありしも。樵夫のそれなうゝでまぐ。春めるぬ鶯の舌もほうゝぬ。谷うげうゝと調ふ声ぞきうゝへりる。

ふるさとをうぐうゝる紀三井寺花のみやとも
迫くなれらん
ふぐらくや岸うつ浪を三熊野の那ちの御山か
ひぐく瀧つせ
とうゝとひつこさ。後を山路をとうぐ。ようちのぐ

ア。おらが門迄まこちとでまり。順禮ま御報謝といふ
白ゆさーま。姿ゐりどれ報謝まいく〳〵ぢんと。ちゃけの
米と盆よりさーいごーつ。熟ゐる〳〵ナはいたら〳〵
ちず。九ッちゐるゝ脊丈白長ー。女子手ま竹の小笠
と柄杓をゆらいく道まつゐれーと。ゐえらいさ死足
も前棘ままさゐれく。血ま
さま。きづちるゐとへゆぐりく懇ゐく其手捕ま水もあて。
いご足をぢくまいふちん。朝の雨ま〳〵庭先いるゆゐ
まて。あをたゆくー。妾ご手とんゐとちく〳〵ちゐびて。怪

我たしたゐゐと。直ま我子をいさちるちく。手づから
順禮の足を洒ゆーま坐舗まとちもゐいく茶一ま
いふ世んと茶杯ま。掌をつけかさゐゐ者ゐいちさすに
とやおりひけん。茶をふまさゆーく側ふより。大ゐ
順禮流ゐい今手 何ゐ戈ゐまゐゐゐと問ゐれば両の掌
をさーいごー。大指を一ッまりく見ちゐいれゐとゐ
るとちゆすゐるをー。おらうちゐなつきさちゐとゐ
智小笠をゐをび。同行二人とちるーあり。ちさゆまや
ちさ食ゐやとねもどゐふいゐよふ女ゐひとゐれーい

よいえ〳〵同行を父さま母さまよも伯べらぢ。孫故の
〳〵とさるを母さまるも。河顔もおぢへす。浄名もなら
ずたゞ。庶叔さまの世話よ野ぢーゞ。往寺よりよい
い。胸氣とゆ〳〵まゝ足たらず。漸近曽ろろよ化ゆ
つれ〳〵みゆことゆ〳〵いい。遠ところくゆ化伯るゞさきよ草
鞋うゆうらつい。庶叔さるぢんうーゞひるるとつけ
此道へたづねるくまのりいまで姑さるのとろかたく
ろべーゞその子を参るるゆ。ゆーしき物ぢとて
ゆ。ゆるべ。何とて森ーハかたのゆるとうと且もゆ

泣めうー。伯父さるの病のようらんようその子のようよ
つるさもせず。おようぢぬ手ろぢよ。茅を奠ト全快ようろ
ろびく。難波とゆうよ太母さるの許へおくりゆるとの言葉
をこのみよ苦しい山坂とゆるうら。仲父さるをさくんえ
ぢりく。この多へうよとなるぢたと。門とのぞきう生よ
ゆるまり。あんドろぢらひ涙ぐむ。おろ小女ゞ脊うろうのぐく
ゆ。理ゆりくうゆふ此道へ一筋ゆんゆ。おーつけ伯父さるの
も。そうトをたづねるくろくらるぢろるとたぐゝと
物ゆうべ。此姑よ心おとさるのうのひるくとゆ女と勝ようさたゆ

げ心をつけくらすれば。順礼のるとうち泣く。其よう
ようなさけ。ふうさとのこまんべおまんがどうぶんのこと
こゝのようなおそれく別てのくが妾い悲しいりの
仲父こゝもりませぬ。何卒此家におきて多べおまへ
側よいゝとるゝ。飯とらくうりと。水汲てなりと妾い
いとひいらこーませぬとつとどうよ泣ぶこーおらう
よひーとらごきつく。左理とおりの心よりおらもこうう
と泣んとせーが。漸よ涙をかくーー山子とーーと支が無益
ことのひごーて。妾もでもうひ泣よよーーうと。涙を

ごぶーーたり。父母の名も顔をかしらこと。捨子とかくんも
垂よのためーーよもあらばさぞたよこうかおさん
よ。妾も側よおきさけれど。妾もとひさーて。四畳敷ん
アみ。一日二日のうちまん此所を立のくものうれへにもこと
し家よもたがこーと。あとりの手袋ひこーよたーーー金一
両とりごーー。是よそうこまあさえんやごよ人妻よお
てのち。紅結買て髪ゆれたこーんや又花のつたおれ
するゝ。どよかく立女もやーーくうこーと。ゝよのもしい人
念ま。順礼ハ頭ちらうりのえく金といよ物ハ不男と。

をとてに數多のかくありますと。首にかけたる財布をとり
ありおちよにみせて。おちさそくに實とのぞきす。何心のく
きたるに。二百両にあまるあまる金あり。うちおどろいて。小六
はさし様故あらんと心に推し卅小判といふ物出あつて
かる盗賊がきるそのとうさいはちつきの難義とかかるか
どれ。人はさし見せのみつ證へ。此妾が借といふものを貸その
まあらんとのひおしんおちは様にさらいて。日もたく申
下されとおねがいるふ。それさの同行飛へも針坂越にかて
いんたなく小やそつかとを道にえらしなるひ。母さまは心も

あるまいと。あさてをみまた幸のあとかきな式笠を門の柱
にかけおきうべ。屈強の枝折なりと。楓葉を紙のく剣てね
ひこみたる竹の小笠を門にかけおきしれと。今抱かせべ
連にまかれし其憂も子供心にうちかえそれ。おちが膝に
枕として嬢寐の夢をむすびけり。おちは一人うち笑
ひおきうまきのかと罪なきのはあらじ。今あひたる
妾なるべ。實の母とおもひよせらん膝をまくらにうてねし
風をせひさてたげるかと。一間の内に蚊帳をつされ。目覚
わつのかに。小女を抱そひ孫のかたらそ。憐れなりとそやく

れぬとや。告ぐる遠寺の鐘の寥々とひびきて。こだま山風に鉦鼓声もまぎれつゝ。谷とめぐりてこゝ。もてくしたる。修行者の菴の外面よりとぼすまくら。函谷をこゝ野鳥林中にうつり。ものづく星のうげつくく。くゝもてやさ。炉の日れ此所をものさすがるのいつ人里よりそんともうりがとしー。樵夫狩人の住舎うゝんうとまれ一夜の宿をもとめみんと泪戸を喧如此ものよーいひいるれい。弓子い小女の同行うゝんと庭まもりもち。栄助ア。ーひとけをさゝれあゝて日本田国乃

修行者なり。いぶせきだるいとひみしうゝ。一夜の御宿よりせん。まつらわるさへきとりゐくと。縁先よりざるのそ煙茶のうくゝうのーらるもうゝり。修行者もうれーげふ一礼のべゝ草鞋をとり。足をそゝぎくゝ。物語ゝ。問に彼修行者元来津の国の産うるよしをひそでうれば。おりいふるさとうゝーくて。もー此所をのびゝる。さようもなうんとうるくれとのとうれば。修行者又いうゝ。我その昔ゝ島山の清舎第多門といへる武士の家臣うゝが縁故みゝく生

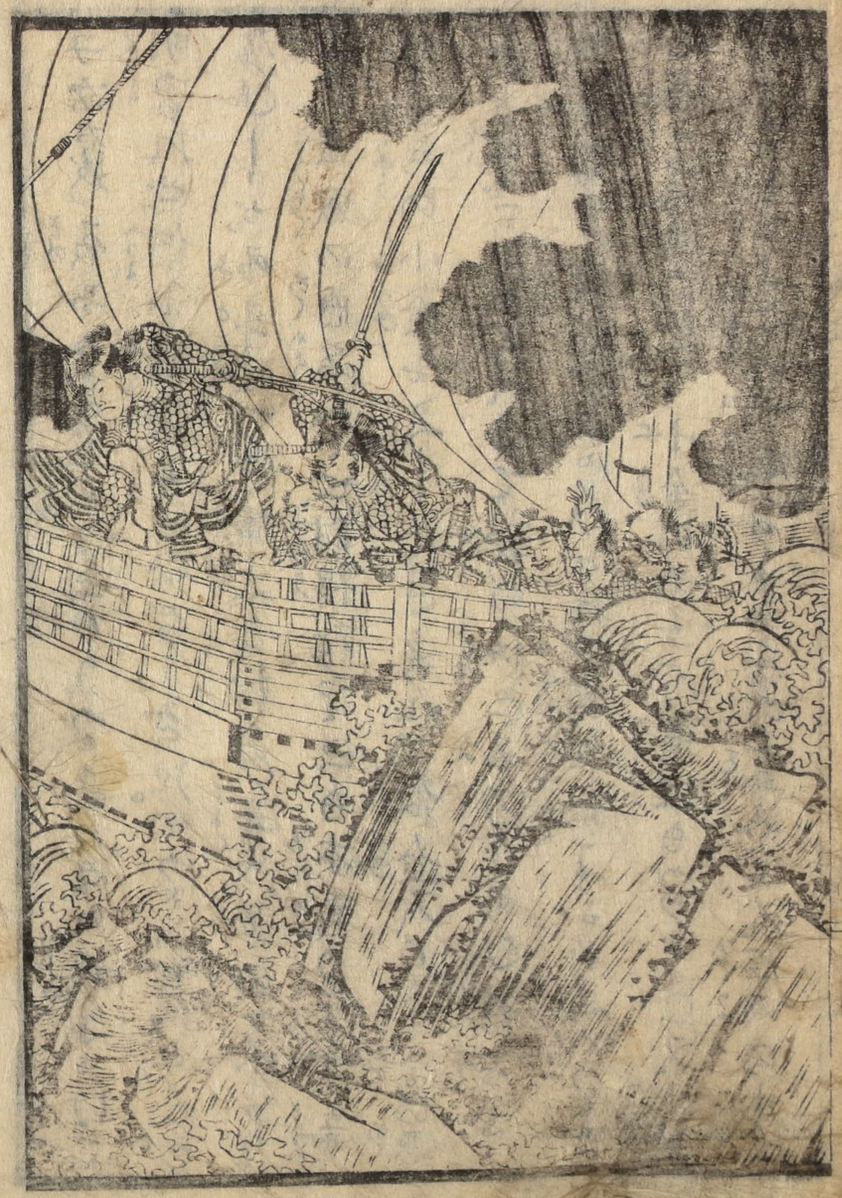
るし。國々武者修行の心ざしなれど。別よおそろしき
るし。うんとやらうよりの面とらをおどろこて。熟
べ。何とやうんみおぼくあり。こゝ彼桃井軍太うのうん
るぞうずと心よろこびうくしおさたる。中加を衣服
のうろよりいざし。修行者の側よりもし。修行
者の性名い桃井軍太とこいひうんーやとうう。修行者
ちちおどうさいうるも。我い軍太うり。我性名とれる
女性いうる人ちくおえすんとうくれば。おら中
かぬさうち。彼の伐とうかくる。軍太身を冈ら

で。とびちうまれよ。女性我非議非道をおこなひく。
みどうう人を殺さでわば。うときというもおぼくば。
くい人さぐううめとおいよお引声あうげ。おぼな
しとう。比丹ちどく。沙往手。津の国十三渡よて殺害
うしうる。与次衛門の娘弓子うるう。手をこれぐうと
されも。しうん沙ろ口ようとううず。桃井軍太さ
名れうの足い。妻ふ敵の伐を討と天道のふをいせ。
いざうちあうう。勝負うせとつめよれば。軍太声れ
うげ数えれば。十余年のむと津の国うたわく。

与次右衛門とうとうとゐい此軍太郎といふまさてらそと。
ゐらうとうざず。切つくる間と右へ身をさけく。まゝこれ
よ女性汝が。父与次右衛門い我より百両の小金を請
取。汝が多門君へおくりたてまつらず。彼小金もうへさ
ごとうば。君への分説として討とてとる。与次右衛門いとう
もうのとさぬ盗賊なり征罰すべきとる盗人の親類血
類。敵なりといえんまん。殺ふうぶりもあるべからず。強我
と討ゐんとうすう。所珍用なる雲水の釈ゐざ討殺せと
西手をとらみて生ようとる引き涙をそゝぐと落一父

与次右衛門ゐうぶう。心よりうるきとられ。鏡おりけて
明ゐのれど。何を證據ゐみひとゝぶをいせんと。とる
たひしが。不斗心づき軍太郎ひ妻が弟のらへより
父ゐ盗賊の悪名をせ。討得たるとも本意なるず妻。
今百両の小金をくゝあとえんが。彼金なりく父の悪
名を雪ぐそのうへまて我の仇と名のりあひ。弱者う
勝負うすぐをやと。とひえんば軍太郎私ゐおりゐいとる
白屋ゐ百両とゐる小金のあゝん道理もつくゝ也又小金
ゐるゐ日せゐ女の小腕ゐるゐあぐの妻らゐん百両の小金

鳴門 巻之九



ようぞひ。うらうらうさんまい。大ひうる仕合ったり。
心よ喜びいったり。百両の小金さく我よくさん
の敵と名のるも有うさんと。金なのさぶーさいひ
おり大よ喜び軍太が方よ眼よくぐり。一間のうちかけ
うく。孫ぶりねくる順礼の小女が小金よとり。音うさ
ようよ。忍びいでーがめるりよ心せきとちて首ようけ
くる賊布の紐をちゃざれば。小女を紐ようく引おと
されうとひて。泣いさーとれ姑さるようる。金を云
のへ他人よもうさぬりのとのうまひく妾よねせつけ。

盗みようかはやと紐よとりてよりよりらいさるる
よくく賊布を掠う。うすけーきのえくぶれば。おらいと
ど心いくれ今危急のさるく百両の小金うされば姑を
活ていいくれね。行くよ時の内貸てとも是手をあくかか
ぶむぞとおもうぶ。敵声をあげるが軍太の方よりねうこえ
んと心づうく声をひそめ。うさ者とちりひくぶてとも
うるぶくよひ和れど小女へ更よ引いれぞ賊布を持ち
逃出れば引留んとする賊布の紐後よかくせー。中肥う
ひきもうえんく。ふうと切小女へ後居よ撞とたとれ小判

四方よりひらめいて。小女い白刃をふるうもあれ姑よ
まん妾を殺すなり。他人をきてくれやく。妾死たをけてくべ。
山声のうぶりよ。よぶくれいおらい軍太よりせーと
油をのく小女が口をあてゆめいるとも声をあげ泣んと
ーーげまぐ九ッうる女子の氣をせるうちよ。息つまる
樓ーをうるたふれふす。打驚きく抱きおこーー心を
ノけく外抱うをど。そやや息絶く死うせるれらい何ぞせ
んと彼方もそづうひ此方もそつうひ身をとけまくも。お
もかひく非難の涙よれるぐ。駅の伝まんうてれー

首尾よく軍太をうちあてせ此金をのく。あと弥もお
うよとむくうんもるさせなくと心のうちよ唱名ーおち
散小判をひうひあげ軍太がまくよ投れば。軍太を金死
殺るく懐中よりとおさめ笈の内よりかさりいぐ。
うり袖みすきんずのとおらよりあうけ切るのぞむ
とちうとうのひ羊時でうたをひーぐ。ら子を立
田よまるび得く剱法を熟練うせーーうれば軍太
ハ弓よ切とくられ。うるをーーとやとひうんおりてる
さーて逃いづれば。弓子づいくおひうけうで肩尖深く

切らみてくすかよ首うら高ーしびいさむとそのうー
ーの六十そうの旅の僧門の柱まうけおそろる作
の小笠を月うげますとしろく。扨も孫鶴子の此家の内
よ宿てーうくん。外ぐれようこん矢ひ心も心うのくざりが。
ようとでーしやと一人ぐら網戸よひくさて内よりり此
光景をみるよりも大ひよおどうき。小女が亡骸いぐさ
あけ。とん孫い何人が殺せーぞと狂氣のごく泣まぎひ。
怨ちおらが軍太をうらとやとるを知るよりも。孫の
仇もし賊婦うくくめとよとらるを力ひくひあげ。おう

正月がけく切うてる。うら子忙しく名よさけてやれまち
多人分説ありといふ顔熟らうまりり女性うれいお時の
加ふくうくせられずやとのふ。うら子おどうき何人
うるさ知らず。旅僧白刃をうとうまを殺さて。うら子
がよとうく上坐まうの式ー。そうのはうとうを西手ぐ
く御ん忘れへ宜うう。貧道い君の侍女ーーーーーー
橋平うう。といのようう子旅僧をうくーー
自其人ううんぐ。ーーーーーー
上向ひ君ーん。鳴ーーーーーー呆れわ

とるがいうまし
ゑてく。孫よてゆ小女。軍太が亡骸
を。行者とんぼる男を殺害うまし
谷〻妾此所にうれ住い一席に尽しごとく
あるとゝ。名のよくてさるものそうれば。頃よりひもいでず
取の佐とる樋井軍太よめぐりあひのゆすりく。小女を
殺しとるまで涙うのぐよりうるわと。指年の涙
よくれ取の佐を討のそうん鳥とうわべ我孫の五人三人
命とおとしいとの。いうでう恨さてまうるんが実。つぐ

孫よても待づず。我仕年四国遍路とてろざし。貫船
に便をうとめ。阿波の鳴門をとるありしも。小舟よのり
とる女一人二支をうりの女子とうるとき。数ヶ所の矢疵
よりうしむありとる。ん捨てとさんも。桑門の本とる
らずと。禅杖死彼小舟に投うけひきあけみうる
んや。妹立田うり我とうるようさもうれし
ふくみ。只一言の言葉もうとさず。そのまゝ
よくも。此女子の畠山家のゆんみよりうるくうら
うびと。貫船のとうのれば。直の津の国うとうるさ

く我のうある。土佐の国高岡郡中島さいふ所よりむとあるとけ。ある家のあるじよりとのうひとそ
るうち。往年より我を胸氣と申さんに病よりうとく
うくぞてうつをあうとうず。人をしく音信せんよりは是ぞ三
いひ。戦国の刻うれば。おりひよ空しく年まつみ。漸病を
愈たる故阿波の国よりうしう。今い彼地よ畠山の府
一族の任とあうを行べ。陰まくうう我孫と仮よりし頃
れとすぐと成ちうせ。此所まで誘引しよ露の命乃
きえうそーもみる。客世のやくそくうんいうする。由

縁よりや立田ゞ豪たる小舟のうちよ。二百両よ余る小金
おう。拾あつめく持うくーが生所も。とーうくぶれば。
くく貪苦よ生れども。一両もつひそてず。世子ふりと
せうくーうる。我一点の赤心と思ひーも。依と云て。此
金故よ死うせーれいろなる。前世の報ぞやと。雨者と注
まどみ。おういうと別よりの物うう。何とやうんむ〇よ
うとへ。ーー此小女よ守袋をうひ中と問れば拝者
へくいうも。赤地の錦の守袋よ某年。某月。某日誕生
の女子彦子とうるせー。脇帯ちうとうくよう。おうを

正体なくさてを。我子う娘うと亡骸よりのごとあげ。身も
うくだうり泣さけぶ。撫手も打おどろき扱い。姫君う
くあるるが。七年ををくめぐりあひ。親子の名を
もちまえず。そうのれとうあるとも。何心弥
のいうとしゆと。歩時涙よそれてげり。お弓いおつるが亡
骸よいけるがごくうとーて。さをよそうとが出うと
實の母とおりひしーとん。むーがちゃくいひうる。ま
らん。あいあひ。えとと憂軒肌とがれーうひも。波の上
よさえうのびうる。苦ーみいあるはしりのとらごとあ

ぐる亡骸の髪摺金具よくう。錠前さーうる衣擦
の抽画ひくよつれる。ひうをれいお弓い何の心も
つうず。ふりうくりうる。抽画よ畠山の家系と。義生丹と
ひくる仙業あり。弓子うのやうす。喜び。露子が口う
業よりてそぐいうて。忽然として息いでつぬのさ
ちようるたれい。奇うりとりふもあるあて。露子橋手
よりるよりもうれーげよりけよれば橋手
さえず。弓子ともぐーさをのあーはしのうれば。露子
いお弓よいぐさつを。さてを實の母さるる娘まそあて

ちるかと。互に手に手をとりうちし。うれし涙にくれ
ゐけり。橋平太郎平多門が十郎兵衛といふ。海賊ふう
されたるよし。徳嶋にくきたりとうとりいだされを。
お弓大におどろき。弩々たちざる夏うぐら良人の獻
に身にまとせいさうぐらへく。何うせんそがひ。義生
丹も此家にあらしい必定せり。此く良人に分説せん
と橋平郎子まをあとより。妾い追つうに高砂とい。
所こくまちあをすぐしと。玄賜きくおさーやうう。
うにんある。後ろげられがいよのうれうとおりくば氣も

きえ。めもくらみ其侭そとに泣ふせーが。くてをきく
じと心をそげをいれ阿波の十郎兵衛。今におりひ
あらばちんと。白刃の鋩口にくくるるの谷に送さる。
花の顔岩わに。くづき微塵とうりて此うせーいうを
れうるの兄弟のをそうり。さても十郎兵衛八栗女
を。立いく直に阿波風にいとり。倒のぞく鉦ごうめ。
一日唱門にとる賈船に乗いしる。元来兵庫の風が
家臣にかくーあきたる官船うれびおりひもかけに手
鉄の三太麻越兵六にをとらめ。手下のうりうくうり。

さうれ既に十郎兵衛も。とくへられんとうのーけれが。
例のごく海中へとびこみ。浪をくぐりて時の間に十余
町をおよぎぬけ。辛して一般の大船をえめとう。彼
船に乗つれば。是もおなじく海賊船なり。西海の賊
ら我のみとおりひーよ別に海賊の首領あるい。是我
くらぶ大なるをたばかるなり。彼首領さへ討てうのび。の
ちに草賊等い。何やとのさあらんと心ふとくも思ひ
きいめ此船にとをけ。のせしに一礼のぶるさまにて
ゆーー側ちくまりまり。刀をぬいく切くうる。うの

賊も臭死おどろいて。そろくたりとぬき合せ。二合三合打
のひられば。十郎兵衛声をあげは。まづまづこれよ覚の
佩刀に男龍の彫あり。我剣に女龍の歌あり。其刀い津
の國長柄里にかいく。盗とりのひーーうくんと向ければ
彼賊も刀をひき我ちろごう。海賊とるりしがむしいみを
ごこの。盗賊小濱の次郎といふ者にて。往年長柄里にて
盗とり。されあちよくれば。佩刀とうすいらんしてい汝是
を知れりやといふ十郎兵衛懐中より二五作があるべうる。
流水帛の袈裟とりいごー。小濱の次郎にみせければ。

手よとりあげくらおどろき。是こそ我所持のせーし。洗
水帛といふ織物なるが。往年長柄の里の大戸よりみり
小女よたらむれ。とりかとせーよさくい。彼大戸の血類な
るるうと。いふよ十郎兵衛涙とこ〳〵とうじ。此袈裟の
ぬーとそ。我父うりと祖父二五作が物ぐうよ。おちく
うとういでそんぐ。小濱の次郎大よおどろき。さくいそのの
夜我たそぶれー。手弱女よ生生のせー男なるやこんおも
ひがけうき。父子の対面うるとと。手ひとうるーて。
喜びうる時よふーぎや。冷風俄よ波上よおこつくる弓

が怨鬼ちげのざくよ。あ〳〵えれいぐきい帆十分よ。ひきあげ
て。矢よりもはやき。大船の艦よとつくつきえんぐ。狂涙迷
波左右ようろう。忽然とーて十余町上艫のうえうたも
どーさきよ。切ぬけうる畠山の官船まちくうれば十郎
兵衛。大よ氣ないくめ。弓子が怨鬼よ切うる。弓子ぎよ
おそれもやうず。白及ひ口よひき咥へ冷笑ようすぐんえ
がうるく。白及とうろく波上の風ようえ
の官船ハ此船めあてよ。漕来て補
のとうれど。小濱のやと

たることあるこゝなし。無念とも
待ぞうらしよ。畠山の家臣に刀をも
かゝめとう。大よ喜び津の国さして。帰舟
おさ浅茅ヶ津の国住吉郡の菴室よりこうわて。後世の
いとなみおこなうつゝしがある夜夢むくゝ。弓子此迷
よあり〜姿まゝく。浅茅が枕辺よりさう。顔よりあけえ
ず。泣わとり浅茅夢心よりうちおどろきとれ亡魂のうち
れまゝひろ。又もうのよよ来ア。るうと。只官念佛とな
へられば。弓子漸く影うちあげ。十郎兵衛よりぐられ〜

変より。橘平。霧子よめぐりあひ〜。一伍一什ゆおうく。詩
アいのぐ。かこねくいのひろるへ。明日い橘平。霧子よ。誘引
て此菴室よまるべし。まうこと彼阿波の十郎兵衛。小漢の
次郎といひ。両賊を初めあるこの。盗賊我怨鬼とうつて。
國清君の家臣よりとゝく。させられば日あらずして此津の
国浅香山の麓。大和川原よりおとうつて。刑罰よりおとうつて。れ
ん其折娘霧子よ。刑罪の太刀とりよさせ。ゆるしば
我怨鬼かけ身よりつきて。霧子よ討せやく〜。
く後海辺よいぐ。龍の眼よる佩刀あるよりつく正

うるとも。彩りのく絵と。めうとゐりくい。猛然とーてる
さめるり。浅草奇異の夏よりひ。次郎九郎よ業しり
らは。物ごりとと。だりよ泣ふーるがかの血頂
てーと海辺よいくそとさてこ。たづのめびれさられと
もそんりのもは。うるありしも常よめうれぬ大浪福を
ひとせでりよ。よせきりり果ーて一瞬の剣とうらあ
げりり。とりあげるよ。鬢うづゆりよおひーる。髑髏
白刃を咥へく。あをれが。是なん弓子が髑髏うのべーと。
いとでうみごとのうみーるありしも。橋本い者ふい

ざうい。此菴室よたづ弥きたりうれば。浅草いらいよ。
弓子よいどとと。とれたりでうるぞよくも無事ごとり
と喜ふよ橋本大よおどろ。くうこ二ゑの時でりかひし
弓子君をよくも。こん景へのよりのうのと話れば浅草へ
漸く涙をおさめ。弓子が夢の告をよくく。今日この菴
室へ両人が来ることをよくも。知りをたりめとーく。
白刃を髑髏の咥へく。うらあげーりでうらうるか
ことりれば。橋本も涙をくれさてい八栗山をてあひよいー
セーが。この世ふくの御別れく。ありるうと。桃井軍太

つるこ
ますけ
えんえんを分て
怨魂賊をきる

が。後行者とうろう。きたりしことより。蘇生丹といくる
仙茶ふくく。再び結ぶ子の蘇生しを。高野とのの所
弓子をまらのうせれど。あるより音信うのうこの。又八栗
山よりうえりが。遂に行方もしれざりしとまで。語ふ
いく四人ひとりくのげきろう。浅草白丸とろうく。
佛前にうるを。一七日がいく念佛。をとうく。唱へけ
るに。髑髏に雫霜のどく。きえらせれど。うの死白丸に
歯形へ。鮮にのこりれば。當國川邊郡今福の常光寺
へもきめうく。彼はるに今もうをと。歯形の鈎どく。あるを

うんく。て一日浅草の孫右子を誘引く。畠山の館
にいくり。国清にあひく。一位一什をのがれば。国清の
みうのびを。おどろきいうにも。汝がををたがをず。小濱
の治郎。阿波の十郎兵衛死ならば。あまをの海をを。
とくくきくちうきやどる。大和川原にもいく。首をを
んとおりひーが。我をめるも。姪をるを右子ふく。そぐよう
まて。此世にあれば海賊阿波の十郎兵衛が。則父多門が
敵うりをを弓子が恐徳ふきをへい討得ざるといにも
あをを。大に喜び其當日にうりれば。国清右子を絶

る。大和川原よりたらいでるよ。弱子いおそるけ
ものうく。明光々たる剣を向ふうぶ。十郎兵衛が
後よりまるこうへーが。首の前まで落よけり。次郎九郎
白。例ようがめかく。弱子一人まくわ。とうのー
我もとも。太刀ぶりちんと。ぶりあげ小濱の次郎殺
ぶちめ。めのもと海賊の首を刎よる。日ろ愚なる
を。似氣なく太刀のうまく声ざ白まで。ぶよとかちん畠
山重門よ似ぶりれば。弱子よいう子が怒鬼ちげ為
よ。そひ次郎九郎まれ多門が霊の力殺をのるうんと。

この人奇異のもよりひるるちつーよう。次郎九郎
白桑門と姿をくいとのく孝行おとろうなく愚直なる
性なれば。後よれうえつく。大徳のきこうえありろいと。な
人為子い國清ぶ。養女とうり吉足知武の舎爺。同名
知門とのよりの殺。婿とる畠山の家いとめでーとろみ
栄へりと。うんうりつくへなるこうり

阿波鳴門巻之五大尾

著者　　栁亭種彦

畫工　　葛飾北斎

近世怪談　霜相夜之星　五冊

奴の小まん　後編　二冊

曲子作傳　總角物語　前編　二冊

文化五戊辰年正月吉日

東都

通油町　村田治郎兵衛

深川森下町　榎本物忠右衛門

同平吉